

## 山岡鉄舟と静岡 ふるさとの歴史 再発見



幕末維新の英傑・山岡鉄舟は、静岡県  
(当時は静岡藩)の重役として静岡県内に  
多くの事績を残しています。その足跡を、  
今に残るゆかりのあれこれで辿ってみま  
せんか。

## ～はじめに～

私達「静岡・山岡鉄舟会」は、静岡と鉄舟との関わりの研究調査を主たる目的として活動して参りましたが、本年設立10周年の節目を迎えることになりました。

その記念事業の一つとして、静岡県内にある鉄舟の事績をマップに記載することを計画し、会員はじめ多くの方々から寄せられました情報をもとに編集委員が現地に出向き、聞き取りや、調査をしてゆかりの深いところを地図にまとめました。その結果、改めて多くの事績を再認識することが出来ました。

情報をお寄せいただき取材にご協力下さいました各位に対し、深く感謝し、マップの完成を共に喜びたいと思います。

平成25年4月1日 静岡・山岡鉄舟会

## 山岡鉄舟 (1836～1888)

通称／鉄太郎

名／高歩(たかゆき)

号／鉄舟(てっしゅう)

徳川幕府旗本小野家に生まれ、後に山岡家に養子として入る。慶応4年の戊辰戦争時に駿府(現在の静岡市)で西郷隆盛と談判し、江戸城を無血開城に導く。その後、静岡藩権大参事(副知事相当)、茨城県参事、伊万里県(現在の佐賀県)の権令(いずれも知事相当)、明治天皇の侍従を歴任。剣禅書の達人として知られ、明治13年、無刀流を開く。

## 鉄舟寺

静岡市清水区村松2188

電話 054-334-1203

もとは久能寺という。今の久能山にあって、およそ1400年前、推古天皇の時代、国主久能忠仁によって創立。その後武田信玄が今川氏を攻略し駿河に入り、久能山に築城することになり、天正3年(1575)現在の場所に移された。

明治に入り、廃仏毀釈(はいぶつぎしゃく)の混乱の中で久能寺も次第に衰退し、住職もいない寺になってしまった。

明治16年、鉄舟はこれを惜しみ再興を發願し、広く寄進を募った。ところが鉄舟は寺の完成を見ることなく明治21年にこの世を去り、清水の魚商芝野栄七が鉄舟の意志を引き継ぎ、明治43年に本堂が完成し、「鉄舟寺」として蘇った。

境内に鉄舟の歌碑「晴れてよし曇りてもよし不二の山もとの姿はかはらざりけり」が富士に向かって建ち、平成20年には新たに鉄舟坐像が建立された。



山門前に鉄舟書の石碑

# 壮士墓

静岡市清水区築地町1-7

慶応4年(1868)8月、旧幕府艦隊は品川から脱走。そのうち咸臨丸は間もなく岩礁に触れ、さらに台風で帆を破損して走行不能となり、曳航されて9月に清水湊へ避難した。そこへ追ってきた官軍の軍艦から砲撃を受けた。官軍の討伐隊は咸臨丸に乗り移り、乗員を切り殺し海に投げ込んで去った。

賊兵の死体を収容することは賊の片割れとみなされるため誰も手をくたさなかったが、次郎長は、「死ねば仏。仏には官軍も徳川もない」と遺体を集め、向島の砂丘に埋めて吊った。後に鉄舟はその志に感じ、「壮士墓」と書いて次郎長に与えた。



巴川河口近くの左岸に建つ

# 次郎長生家

静岡市清水区美濃輪町4-16

電話 054-353-5000

次郎長、本名は山本長五郎。文政3年(1820)元旦、現在の清水区美濃輪町に生まれる。叔父山本次郎八の養子となり、「次郎八の長五郎」が転じて次郎長と呼ばれた。前半生は「博徒の親分」であったが、後半生は、鉄舟と知りあったことを契機に社会に広く目を向け、社会事業に数多く携った。

具体的には、有度山の開発、三保の新田開発、巴川の架橋、遠州相良での油田発掘、英語塾の開設、富士の裾野の開墾などである。

次郎長は、鉄舟との出会いによって人間としても成長したといえる。今でも毎年8月に開催される「次郎長道中」の先頭は、鉄舟である。

明治26年に74歳の生涯を閉じた。墓は、清水区岡町の「梅蔭寺」にある。



館内に次郎長ゆかりの品を展示

## 美濃輪稻荷神社

静岡市清水区美濃輪町6-12  
電話 054-352-2310

美濃輪稻荷神社は、清水次郎長生家と同じ町内にあり、社務所には鉄舟書による扁額がある。「美濃輪稻荷神社」と縦に2文字ずつ書いた珍しいものである。落款に「正五位」とあることから、鉄舟が明治天皇の侍従を退いた明治15年に揮毫したものとわかる。

どのような経緯で書いたものかは不明だが、次郎長との深い関係から考えれば、鉄舟が次郎長宅に近い同神社に参拝し奉納したものと思われる。

なお、神社には、次郎長が奉納した玉垣が今も残っている。



実物の額は社務所に保管

## 矢倉神社

静岡市清水区矢倉町5-7  
電話 054-366-6330

本殿の主祭神は日本武尊命、景行天皇、神武天皇の三柱。配祀神は事代主命、蛭児大神の二柱。

当地は、日本武尊命東征の際、軍営をしき兵站部や武器庫を置いた場所と伝えられている。天曆2年(948)藤原匡房が神武天皇を合祀した。天正18年(1590)豊臣秀吉は小田原出兵の途上、戦勝を祈願し太刀を奉獻したと伝えられている。

鳥居手前の手水石の正面に、鉄舟書による「澄境」(ちょうきょう、清める場所)の文字が刻まれている。



手水舎にある手水石

## 藤屋 望嶽亭

静岡県清水区由比倉沢84-1

電話 054-375-3486

室町時代末期には、座敷から眺める富士山が絶景であったために「望嶽亭」と名づけられ、すでに名所絵図にその名を残している。江戸時代に入り、東海道五十三宿の「由比」と「興津」との間宿(あいのしゅく)で脇本陣、お立場(たてば)、茶亭、網元の「藤屋」として有名になり、多くの文人墨客が訪れた。

松永家(望嶽亭)の伝承によると、慶応4年(1868)3月7日深夜、鉄舟は、目的の駿府を目前に薩捶峠で官軍に追われ望嶽亭に逃げ込んだ。主人の松永七郎平は、とっさに蔵座敷に通し、漁師姿に着替えさせた。鉄舟は、船頭栄兵衛の操る船で清水湊に向かい、次郎長の手助けで無事に駿府に着き、西郷隆盛との談判を果たした。



薩捶峠の登り口にある望嶽亭

## 由比本陣公園

静岡県清水区由比297-1

電話 054-375-5166

東海道由比宿の本陣跡で、由比本陣家から平成元年に由比町が購入して、由比本陣公園として整備した。「東海道広重美術館」「東海道由比宿交流館」そして明治天皇が三度にわたり休憩された「御幸亭」(本陣の離れ座敷)が由比本陣記念館として復元されている。

小堀遠州作と伝えられている前庭には、徳川家康お手植えの松(現在は枯れてしまい碑が建っている)。また馬をつないだ榎(かや、雷にあい現在は二代目)があることから鉄舟が「松榎園」(しょうひえん)と名づけた池泉回遊式庭園がある。



鉄舟書による「松榎園」の扁額

## 久能山東照宮 実割梅の記念碑

静岡市駿河区根古屋390  
電話 054-237-2438

かつて駿府城に徳川家康お手植えと伝わる梅の木があった。この梅は「核おのづからゑみわるゝ」ことから「実割梅」と呼ばれていた。

明治維新の混乱の中で、この由緒ある梅が失われるのを惜しんだ久能山東照宮の宮司は、徳川慶喜の許しを得て、この梅の木を社殿石段前に移植した。そして明治9年、この梅の由来を記した記念碑を建てた。

記念碑の碑文「実割梅之碑」は勝海舟の、上部の「実割梅之記」の五文字は鉄舟の筆である。



梅の木の樹齢は370年余

## 西郷・山岡会見の碑

静岡市葵区伝馬町1-2地先

慶応4年(1868)3月9日、鉄舟が東征軍参謀西郷隆盛と会見した松崎屋源兵衛宅跡地に鉄舟が西郷と会見した碑が建っている。この会見によって徳川幕府15代将軍徳川慶喜の処遇をはじめ、江戸城の明け渡し、軍艦・武器の引渡しが合意された。

このとき西郷は、鉄舟の人柄に感銘を受け、「命もいらず名もいらず、官位も金もいらぬ。このような始末に困る人でなくては、艱難をとみにして国家の大業を成し遂げることはできない」と鉄舟を評したと伝えられている。

後に勝海舟と西郷の会談により講和条件が最終的に決定され、江戸城無血開城が実現した。

なお、この会見の碑は、昭和42年静岡市文化財に指定されている。



西郷と鉄舟の会見の碑

# 教 導 石

静岡市葵区追手町9-18

「富や知識の有無、自分の垣根を越えて互いに助け合う社会を目指す」。この趣旨に賛同した各界、各層の人たちの善意で、明治19年に建立された。

正面の「教導石」の文字は鉄舟の書で、上部には静岡県内各地および東京日本橋、京都三条大橋までの距離が刻んである。右側面の「尋ル方」に相談事、知りたいことを貼っておくと、左側面の「教ル方」に知っている人が答えを貼り付けておいた。店の開店、発明品、演説の広告なども掲示された。背面には、石柱の建立に賛同した80名の名前が刻まれている。

なお、この教導石は、昭和59年に静岡市文化財に指定されている。



静岡県庁前の堀端の「教導石」

# 安田屋そば店

静岡市葵区横内町53

電話 054-245-0981

明治を迎え、徳川慶喜に從って旧幕臣たちも駿府に移住してきた。そば好きな彼らは「駿府そば」の味に満足せず、そば屋に注文をつけ、なかには直接技術指導する人も多く、これにより駿府そばの味は大変革を遂げ、江戸とも異なる「駿河そば」が生まれた。

慶喜は安田屋にもよく立ち寄り、その際に店主は家臣から慶喜好みの味と「変わりそば」の数々を指導された。また鉄舟は、「腹が減ったら安田屋に行け」と言っていたため、旧幕臣たちがよく来たという。

鉄舟をはじめ勝海舟、高橋泥舟などの三舟も立ち寄り、そば代として三人は書を書いて置いていったが、第二次大戦の火災で焼失してしまい、現在残っているのは鉄舟の軸が一幅だけである。



創業は慶応3年(1867)の老舗

# 山岡鉄舟邸址記念碑

静岡市葵区水道町1-4地先

鉄舟は、明治2年静岡藩の権大参事(副知事に相当)として、井宮の十分一(じゅうぶいち)の役所跡に移り住んだ。十分一とは正しくは「十分一御蔵」といい、江戸時代、安倍川、藁科川の上流から筏(いかだ)で運ばれてきた木材などの林山物を、安倍川のものは井宮上十分一、藁科川のものは安西下十分一という役所で検査し、十分の一を税金として徴収した。その後、この跡地は安倍軽便鉄道の井宮駅となった。

大正13年、静岡市はこの地に鉄舟の住居跡記念碑を建てたが、老朽化が進み道路を拡張する際に撤去されたままになっていた。静岡・山岡鉄舟会はこれを惜しみ、平成22年4月、水道町町内会と協力して再建した。



再建した鉄舟邸址記念碑

# 水天宮

静岡市葵区上土新田9

祭神は、天御中主之神。祠の正面に鉄舟書の「水天宮」の額がかけてある。

明治維新を迎え徳川家が駿府に移ったとき、禄を失った旧幕臣が続々と移り住み、その人たちは「お泊りさん」と呼ばれていた。この「お泊りさん」たちは、船で荷物を江戸から清水湊へ運び、そこから巴川を遡って上土(あげつち)に到達した。その頃の巴川はよく氾濫したため、「お泊りさん」の仲介により、水難厄除けとして東京三田の有馬水天宮を分社して明治5年に祀った。以来、水天宮は水難除けと安産の神様として崇められている。

「水天宮」の書は、鉄舟が献上したもの。鉄舟には珍しく楷書で書いている。実物は社務所に保管されている。



祠の「水天宮」の額

## 源昌寺 鉄舟の歌碑

藤枝市大手1-14-10  
電話 054-641-3377

源昌寺は、藤枝市周辺を治めていた田中藩城主の酒井忠利が慶長6年(1601)に建立した寺である。幕末期、田中藩の小池敏之は棒術、柔術、剣術に秀でていたが、さらに剣の修行のため江戸に出て鏡心明智流桃井春蔵の志学館、北辰一刀流千葉周作の玄武館で修行し、両門の免許を得るまでに上達した。鉄舟とは玄武館の同門として知り合い、剣友としてともに研鑽につとめた。

慶応3年(1867)、敏之が藩命により帰藩するにあたって、鉄舟は彼の剣才を惜しみ漢詩を書いて贈った。その歌碑が敏之の墓とともに境内に建っている。文面は「窓下日長多得睡 尊前花老不供詩」とある。



桃井春蔵の歌も同じ石碑に

## 龍 沢 寺

三島市沢地326  
電話 055-986-2206

慶長年間(1596～1614)に臨濟宗に改宗されたというが、近世以前の寺史は判然としない。実質的な開山は江戸時代の高僧白隠である。宝暦10年(1760)、白隠の高弟東嶺円慈によって伽藍が創建された。

鉄舟は、侍従時代、当時の住職星定のもとに3年間東京から通って参禅し、ある日の帰途、箱根山中から富士を見て大悟し「晴れてよし曇りてもよし 不二の山 もとの姿はかはらざりけり」と詠んだ。またその間、同寺で制作中だった漆喰鏝絵(こてえ)の名人伊豆長八とも親交を持つようになった。

毎年11月23日の観楓祭には所蔵品が一般公開され、鉄舟、白隠、長八など多数の書画を拝観できる。



龍沢寺は臨濟宗妙心寺派の専門道場

## 宝福寺

下田市1-18-26  
電話 0558-22-0960

永禄2年(1559)開基。嘉永7年(1854)日米和親条約の交渉にあたり日本全権の本陣となり、下田奉行所が置かれていた。

文久3年(1863)、下田に入港していた土佐藩主山内容堂が同寺を宿舎としていたところ、江戸から入港してきた勝海舟が訪れ、坂本龍馬の脱藩の罪を許してもらった寺としても知られている。

慶応元年(1865)には、葦山代官の江川太郎左衛門の本陣として農兵の訓練が行われた。

寺には、鉄舟が明治13年に来訪したときに使った丸い錨(つば)の木刀や書が残っている。なお、墓地には、米国総領事ハリスに仕えたお吉の墓がある。



幕末の歴史舞台となった宝福寺

## 岩科学校

賀茂郡松崎町岩科北側442  
電話 0558-42-2675

明治13年に竣工した伊豆地域で最古の小学校。なまこ壁の社寺風建築様式とバルコニーなど洋風を取り入れた建物で、昭和50年に、国の重要文化財に指定されている。現在の建物は、平成4年に2年間の改修工事を経て復元したもの。

玄関正面の「岩科学校」の扁額は、時の太政大臣三条実美の書で、その上の龍は伊豆長八の作。2階日本間の欄間には、長八作の千羽鶴が描かれている。

また、岩科商社の求めによって、明治12年に鉄舟が書いた書が残されている。



和洋の特色を生かしたユニークな建物

## 伊那下神社

賀茂郡松崎町松崎31  
電話 0558-42-2268

祭神として、山神(彦火火出見尊)と海神(住吉三柱大神)を祀る。鎮座の年代は不詳であるが、四世紀との説もある。境内には周囲8メートル、高さ22メートルの大イチョウがあり、航海の目印にもなったと伝わっている。

ここには明治8年と13年に鉄舟が訪れており、下田方面にも足跡を残している。松崎は、鉄舟と親交の深かった伊豆長八の出身地で、鉄舟が大書した「伊那下」の文字を長八が大理石ににせて漆喰仕上げをした大扁額がある。また「伊那下神社」と鉄舟が書いた軸もある。



赤い鳥居と樹齢約1000年の大イチョウ

## 徳源寺

沼津市原297  
電話 055-966-0020

建久4年(1193)、源頼朝が富士の巻狩りの際に陣屋を置いたのが始まりと伝えられている。その後、律宗の寺を経て、弘安元年(1278)に賢宗(円覚寺開祖無学祖元の弟子)が徳源寺として創建した。現在は、臨済宗妙心寺派の寺。鉄舟は東海道を往来したとき、よく立ち寄ったという。

境内には、樹齢数百年という「頼朝お手植えの松(三代目)」、富士山の溶岩を生かした庭「対笑園」がある。

山門の左右の柱の聯(れん)は鉄舟の書で、右は、「坐断千聖話頭 明治17年7月」、左は「打破群魔境界 正四位山岡鉄太郎書」とある。また本堂正面にも、鉄舟書による「嶽陽禅林」の扁額が掲示されている。



山門の左右の柱の聯は鉄舟の書

## 鯛屋旅館

富士市吉原2-3-21  
電話 0545-52-0012

天和2年(1682)に東海道吉原宿の旅籠(はたご)として現在地で創業という歴史のある旅館。鉄舟は、東京と静岡を行き来するときに定宿にしていた。また清水次郎長も、富士裾野開墾事業に携わっていたとき、よく宿泊していたという。

同旅館は、現在、吉原地区街づくりの核施設にもなっていて、館内には、当時の主人の名を鉄舟が書いた大看板「鯛屋與三郎」、次郎長像、参勤交代で大名が泊まった宿札などが展示されている。

東海道五十三宿の中でも、江戸時代から同じ場所で同じ家業を続けている旅館はほとんどなく、希少価値が高い。



「鯛屋與三郎」の看板

## 万野共同墓地 万野原開拓供養碑

富士宮市万野原新田字琴平東337

富士宮市万野原地区の開墾は戦国時代末から始まっていたが、寒冷地に加え火山灰地のため用水が得られず失敗の連続であった。明治に入って静岡藩(現在の静岡県)に移住してきた土族のための開墾先として三方ヶ原、牧之原とともに万野原が入植地として選ばれ、万野原には明治2年5月から入植が始まり、多くの困難を経て今日に至っている。

石碑は、静岡に移住した旧幕臣の殖産に尽力してきた鉄舟がこの地を訪ねた際に、無縁仏になった開拓者の霊を弔うために揮毫した書をもとに明治16年に建立された。表面には、「南無阿弥陀仏」「正四位山岡鉄太郎書」「山岡高歩」の字と「鉄舟」の印が彫ってある。



右端が供養碑

# 方 広 寺

浜松市北区引佐町奥山1577-1  
電話 053-543-0003

建徳2年(1371)、後醍醐天皇の皇子無文元選によって開かれた臨濟宗方広寺派の総本山。170の末寺を有し、その多くは静岡県西部地方にある。老杉に囲まれた約60ヘクタールの境内は、荘厳な雰囲気包まれている。

明治14年、山火事により堂塔伽藍が消失した折、鉄舟は自ら勸進帖を記し、広く寄進を募って再建に努めた。また同寺から開山の無文元選に国師号宣下の願いが出されたときも尽力して、明治17年、聖鑑(しょうかん)国師の号が与えられた。

本堂に掲げられている山号の扁額「深奥山」は、鉄舟が揮毫したものである。



本堂正面の扁額「深奥山」

# 金原明善生家

浜松市東区安間町1  
電話 053-421-0500

明治から大正時代にわたり、社会貢献一筋に生涯を捧げた金原明善の業績を顕彰するために保存されている建物である。

明善は、私費を投じて天竜川の改修工事や上流の植林など数多くの社会事業を手がけてきた。「勸善会」(出獄人の保護事業)「天竜運輸」「天竜木材」「金原疎水財団」など、今日なお多くの事業が継承されている。

鉄舟は、その大志に感銘を受け、明治初年以來親交があり、明善に贈った軸が展示されている。



金原明善の生家

## 永江院 (ようこういん)

掛川市和光 3-12-2  
電話 0537-22-2917

延徳元年(1489)に以翼長佑によって創建された曹洞宗の寺。寺の総門にある龍の彫刻は、文禄2年(1593)の棟札によれば名匠藤原棟教の作で、時の掛川城主山内一豊の寄進による。

この龍にまつわる逸話として、龍が門前の池に水を呑み出るので、近隣の人々は恐れて周囲に金網を張り出られないようにしたという。

寺には鉄舟の豪快な字による襖(ふすま)があり、落款(らっかん)は「入木(じゅぼく)傳流五十式世山岡高歩」とある。当時の住職は鉄舟と同じ書家であったことから二人の親交は深く、「この寺に逗留して酒を酌み交わす仲であった」と伝えられている。



龍の彫刻がある総門

## 油田の里公園 相良油田跡

牧之原市菅ケ谷2525-1  
電話 0548-87-2525

相良油田は、明治5年に発見された太平洋岸唯一の油田である。明治6年、鉄舟の義弟石坂周造が鉄舟の支援をえて本格的に採油を始めた。最盛期の明治17年頃には、年間721キロリットル(ドラム缶約3600本)を産出した。

採掘された井戸数は240坑、最も深い井戸は255メートル、最盛期には約600人が働いていた。ガソリンや灯油を含んだ極めて良質な石油で、そのままでもランプや自動車に使用できるものだった。

油田跡は「油田の里公園」として整備され、油田資料館には、当時の採掘道具や復元井戸(雪小屋ともいわれている)が展示されている。



復元した井戸小屋(雪小屋)

## 榛原高等学校 春風館揭示

牧之原市静波850  
電話 0548-22-0380

明治2年、金谷原(現在の牧之原)に旧徳川幕臣が開墾のために入植した。指導者の中條景昭は、士気を鼓舞するために、親友の鉄舟が開いた無刀流の道場・春風館を開設した。

明治34年、榛原郡立榛原中学校(現静岡県立榛原高等学校)が設立され撃剣部ができる。中條の長男克太郎ら残った士族は、「後進の子弟に心身鍛錬の道を」と徳川家からの学資補助金を同校に寄付し、翌年、講武館(後に春風館に改名)が開館した。同校の剣道部史によると、克太郎は鉄舟の最後の高弟だったとある。明治16年に鉄舟が竹刀の長さについて教示した自筆の「春風館揭示」の扁額が校長室に掲げられている。



「春風館揭示」の扁額(上は拡大した部分)

## 月岡八穂神社 関口隆吉顕彰碑

菊川市月岡8

関口隆吉は、幕臣関口隆船(現御前崎市佐倉の池宮神社宮司佐倉氏の出)の子として江戸で生まれた。幕府崩壊後、明治3年に金谷開墾方頭取並(牧之原開拓)となり、城東郡月岡村(現菊川市月岡)に移住した。

その後、山形県権令、山口県県令(ともに知事に相当)、元老院議官などを歴任し、明治17年に静岡県令(19年に地方官官制の改正により初代の県知事)に就任した。

鉄舟と隆吉は江戸でともに剣術を修行した親友で、同年齢ということもあり、家族ぐるみの交際をしていた。鉄舟は、徳川慶喜の命により慶応4年3月9日駿府(現在の静岡市)へ出向き東征軍参謀西郷隆盛と会見して江戸城を無血開城に導いたが、その駿府行きにあたって隆吉は、愛用の刀を貸したといわれている。



関口邸跡地に立つ顕彰碑

## 牧之原台地 中條景昭の立像

島田市谷口上4846-37地先

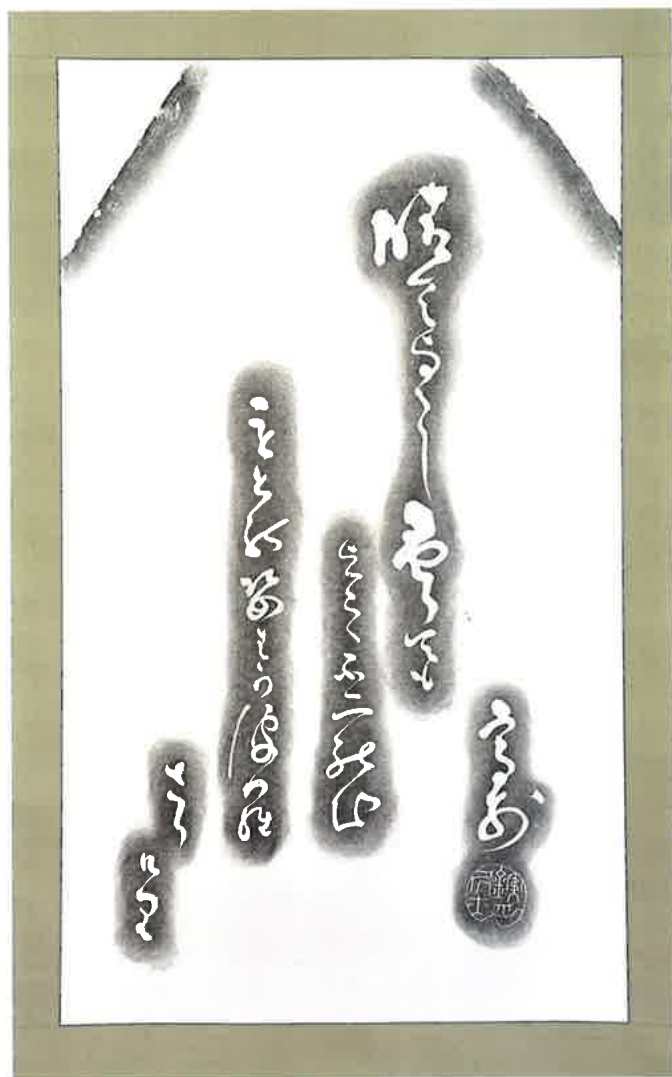
牧之原台地には、静岡県を象徴する風景ともいえる約6000ヘクタールの大茶園が広がっている。この茶園は、旧幕臣たちが明治2年に開拓を始めたものである。

駿府入りした徳川慶喜を警護していた精鋭隊（後に新番組、隊長は中條景昭）がその役目を終えたとき、鉄舟のすすめでこの地に入植した。台地の一角には、終生官途に就くことなく開拓に身をささげた中條の立像が立っている。

この牧之原台地は、富士山、南アルプス、大井川、伊豆半島を望む絶景スポットでもある。



立像の正面には大茶園



晴れてよし 曇りてもよし 不二の山  
もとの姿は かはらざりけり

(鉄舟寺境内にある鉄舟歌碑の拓本)